

草のみどり

Kusa no Midori



特集

2024年度秋卒業式

FRONT LINE

理工学部 | 就活×理工学部×研究

国際経営学部 | Think like GLOMAC



Think like GLOMAC

Faculty of Global Management

中央大学国際経営学部は
「Global Management of Chuo University」
から取った「GLOMAC（グロマック）」を
愛称として学生や教職員に親しまれています。





専門性を備え、実践知を身につけたグローバルリーダーへ

国際経営学部では、設置科目の7割以上が外国語(主に英語)による授業。卒業に必要な単位のすべてを英語による授業で取得することも可能です(留学生のみ、日本語の授業が必須です)。また、右記の電子資料をテキストやサブテキストとして活用。海外の最新事情を積極的に取り上げるとともに、英語運用能力の強化をめざします。

- **米国ProQuest社「Ebook Central Academic Complete」**
基本学術洋書15万冊を収めたデータベース。
- **日本経済新聞社「Nikkei Asian Review」**
アジア各国の政治・経済・マーケット・企業動向などに関する、日本経済新聞社の英訳記事や独自のコラムを掲載。
- **フィナンシャルタイムズ「FT.com」**
英国の日刊経済紙「Financial Times」の電子版。

国際経営学部特有の学習メソッド

グローバル人材を育成する留学プログラム

1年次から3,4週間の海外短期留学を経験できるGlobal Studiesプログラムを実施します※。海外の企業活動や文化に触れ、グローバル人材の基礎力として必要な、自己管理能力、異文化適応能力、問題解決能力、コミュニケーション力を養うことを目的としています。国際経営学部ならではの企業訪問やインターンシップなどのビジネスプログラムも予定しています。

※開講プログラム数や応募者数により2年次以降の履修となる場合もあります。

基礎教育を重視した多様な授業実施方針

カリキュラムの基礎部分に当たる、GLOMACスタンダード科目群におけるすべての科目(経営学入門、経済学入門、戦略経営論、国際関係論、ミクロ経済学、国際経営論、経営統計入門)では、より理解を深めるために週2回(計200分)授業を行い、徹底した基礎固めをします。科目によっては、複数名の専任教員が1つの科目を担当し、ローテーションでそれぞれの専門性を活かした授業を展開します。

企業への訪問調査

「Open Your Eyes to Think of Your Own Career」をコンセプトに、学生が企業や公的機関を訪問調査し、社会の入り口部分を学ぶ企画を実施しています。この企画では社会への関心を高め、担当教員の指導のもと、訪問に向けて社会人としての基礎的なマナーを学び、訪問までの準備を通じて段取りを整えます。学生が教員と協働して主体的に企画・運営を行っていることも特色の一つです。

初年次から始まる少人数による演習(ゼミ)

1年次の「入門演習」では、PCスキルの向上やメディアリテラシーの向上に加え、経営学や経済学、統計学、地域研究といった学びに取り組み、2年次から開始される専門演習を学ぶための基礎力を養います。「専門演習」はその専門性を高めるために継続して学修する構成とし、2・3・4年次に設置しています。

自分たちで“創る”国際経営学部発の学生団体

国際経営学部の特色として、学部発の学生団体が主体となって行う多様な活動があります。広報活動では学部の魅力を発信し、留学支援では学生の海外挑戦をサポートしています。

さらに、学習支援活動を通じて、学生同士が助け合いながら学びを深める環境が整っています。学生団体の活動により、学部全体が一体となって成長できる場を提供しています。

● 学生団体MANA

GLOMACの魅力を伝えるためSNSを通じた広報活動を実施する団体です。

● G-ACE

留学や異文化交流、英語学習に興味を持ってもらうための活動を行う団体です。

● 企業訪問サポーター「CVS (Company Visit Supporters)」

学部における正課外企画「Company Visit: 企業訪問」の企画・運営をしています。

● Venture Code

国際経営学部において、プログラミングやIT技術を学習の支援をしています。

● Face to Face: GLOMAC

高校訪問を通して、GLOMACの魅力や経営学の面白さを発信しています。



学生団体MANAの代表として

国際経営学部国際経営学科3年
名古屋大学教育学部附属高等学校出身

澤田 魁星
さわだ かいせい

高校時代、「誰もが活躍できる社会を作りたい」と考え、得意な英語を活かせる国際経営学部を志望しました。多くのことを学び、多くの人に出会うことができ、今ではこの選択は間違っていないかと確信しています。GLOMACでは多種多様な経験ができます。その中でも私は学生団体の一員として、多くの仲間を支えられて豊富な体験をしました。

学部での学び

国際経営学部では7割の授業が日本語以外で開講されており、私もほとんどの講義を英語で受講しました。この学部がそれ

上に特異なのは、使う教材も海外のものである点です。ただ英語で学ぶだけでなく、グローバルスタンダードを世界の共通語とされる英語で学ぶことは、このグローバル化社会における大きなアドバンテージになると考えています。

私も入学後に参加した海外でのインターンシップでこの恩恵を体感しました。周囲の学生がビジネス環境や現場での英語活用にも苦勞する中、私は日頃の勉学のおかげでスムーズに働くことができ、本当の意味で企業に貢献することができたと考えています。

仕事で必要な洞察力や課題解決能力は、正しい知識から生まれます。国際経営学部で

学生団体から得られた実践知

1年生の頃、私は新たな挑戦として広報団体MANA(現・学生団体MANA)への応募を決めました。高校までの生徒会や劇

は実務経験のある先生方の講義やグループワークなどを通して、基礎的・実践的英語力や専門知識を身につけることができます。

このほかにも、現役のビジネスパーソンによる講演形式の講義などは、経営への興味を増大させるだけでなく、将来のキャリアを考えるうえで大いに役立ちました。多種多様なバックグラウンドを持つグローバルな先生方から学べることも本学部の魅力です。



団などの課外活動を通じて、組織における広報活動の重要性を感じ、将来的にマーケティングなどに貢献したいと考えていました。

私が参加した頃は12名程度しか所属しておらず、活動も今ほど活発ではありませんでした。当初、新人としてInstagramの投稿を担当しており、「どうやって見えてもらえるか」「魅力が伝わるか」を日々考えなが



学生団体MANAの声

学生団体MANA

学生団体MANAは、広報団体として2021年に設立された学生主体の団体です。InstagramやYouTubeなどSNSを活用した広報活動をはじめ、オープンキャンパスにおける学部企画の運営など高校生に向けた幅広い活動に従事しています。2024年度より他団体の合流を経て、学部生の学習支援やキャリア支援などにも力を入れています。設立理念であった「国際経営学部の魅力を発信する」ことから始まり、現在は魅力を作っていくような団体をめざしています。

現在、当団体は管理チームと3つのセクション(メディア、制作、プロジェクト)に分かれています。管理チームは代表と各セクションの統括で構成されており、外部との連携や団体全体の方針決定などを行なっています。メディアチームと制作チームは、それぞれSNSの投稿デザインと映像を作成しています。専門性に分かれて活動することでその分野でのスキルを高めています。プロジェクトチームはブランディング・学習支援・キャリア支援で構成されており、各々が目的に沿って

活動しています。このように多くのメンバーがそれぞれのスキルや経験を活かし活動できることも当団体の魅力であり、これにより幅広い分野に挑戦できています。



MANAでの体験

さとう きしろう 国際経営学部国際経営学科3年
佐藤 紀祥 私立佼成学園高等学校(東京都)出身

私は大学1年生の冬に学生団体MANAに参加しました。団体内では大学2年の4月からプロモーション班(現・ブランディング班)、大学3年の8月よりキャリア班と、1年半で2つの班の設立に携わり、各班のマネージャーを務めました。

当時、プロモーション班はそれまでのSNS中心だった広報活動とは異なり、プロジェクトベースで中長期的な広報活動への取り組みを行うことができました。また、ブランディング班では団体自体の魅力や知名度向上をめざし、団体名刺の作成やプロモーション映像の制作に取り組みしました。そして8月から始動したキャリア班では、学部生向けのキャリア支援を行っています。

この班での取り組みにより、当団体の活動は高校生をメインターゲットにした広報活動から、学部生や卒業生をはじめ、過去・現在・未来にわたって国際経営学部にかかわるすべての人に向けた幅広い活動へと発展しました。その結果、広報団体としてスタートしたMANAは、学部全体を包括的にサポートする団体へと成長することができました。国際経営学部には他のどの大学・学部にもない魅力があると思います。学生団体MANAの活動を通じてその魅力を広く発信するとともに、学部の魅力をさらに高めていきたいと考えています。

挑戦と責任

もりた じゅり 国際経営学部国際経営学科1年
森田 珠梨 私立広尾学園小石川高等学校(東京都)出身

私は高校3年生の春に、学生団体MANAが運営するワークショップに参加したことがきっかけで、中央大学国際経営学部とMANAに興味を持ちました。学生自らが学部の広報活動を行うことに意義を感じたからです。MANAに入った後は、オープンキャンパスの運営に携わり、大学生活について紹介する企画を担当しました。初めての経験ばかりで困難に直面しながらも、先輩方やチームメンバーの支えを受けて一つの企画を完成させたときには、強い達成感と充実感がありました。

また、MANAの同期メンバーとは、箱根旅行に行くなど、プライベートでも大事な友達になりました。現在、私はMANAのXやホームページの運営をするポスト班に所属し、高校生向けにブログを執筆しています。一人でも多くの高校生に私の受験経験や大学生活の情報を届けられるよう工夫を重ねています。これらの活動を通して、コミュニケーションツールの活用方法、ワードプレス(ローコードのウェブページ制作ソフト)の編集知識、伝わる文章の書き方など、得られたことが多くありました。最近、留学に行く先輩の後任としてマネージャーの役割を引き継ぎました。挑戦と責任を担うことで、成長する機会を得られることに感謝しています。

ら活動していました。ここでの経験は代表になるうえで重要な経験だったと今では感じています。

所属して半年後に二つの大きな決断をしました。それはオープンキャンパスでの企画統括と副代表への就任です。オープンキャンパスは学部の魅力を発信するうえでとても重要な機会であり、私たちの団体も力を入れていました。その中で急遽一つの企画を担当することになり、1カ月もない状況で完成させる必要がありました。ここで「品質」と「スピード」のバランスを取る難しさを痛感し、取捨選択の重要性を学びました。そして、私はそれから1年半の間、副代表として活動しました。外部との連絡やタスク管理などを行いながら、1丁の知見や講義

MANAでの出会い

で学んだ経営知識を活かした新たな施策も行いました。たとえば、採用活動の戦略立案や規模拡大に合わせた組織変革などです。自分の趣味や大学での学びがより実践的な場で活用できた経験であり、「学び」を深めるうえで重要なことだと確信しています。

学生団体MANAでは二つの大切な出会いがありました。一つは信頼できる仲間です。その中でも初めて経験したオープンキャンパスから一緒に活動している同期には、多くの場面で助けられたと感じています。同期との議論から生まれた施策も多く、私が団体に貢献し続けられたのも同期のおかげだと強く感じています。もう一つは後輩

代表として考える展望

です。団体における後輩はただ慕われるだけでなく、今後を担っていきけるように育てていく必要もあります。団体についてよくわからないところから始まり、一緒に活動していくうちに多くを学び成長していく様子は、私にとっても大きなモチベーションになっていました。彼らがいるおかげで団体の将来を考え、最後まで活動できているのだと実感しています。

広報活動をする側からマネジメント側になって2年が経過し、今では70名近くの学生が所属しており、自分たちならもっとできると強く感じるようになりました。自分の能力には限界があるのを感じるとともに、

チーム全体としてはどこまでもいけるように思えます。今までは「国際経営学部の魅力を発信する」ことを目的に活動しており、活動の対象は国際経営学部の受験生や一部の学部生にとどまっていた。2024年度からは学習支援やキャリア支援を行う部署を新設し、入学後や卒業後もサポートできるような団体をめざしています。まだこれらの活動は始まったばかりであり、多くのことは達成できていませんが、今後はより多くの高校生や大学生が社会で活躍できるようなサポートをしていきたいと思っています。受験生、学部生、学生団体のメンバーなど、かわるすべての人が学び成長できることをモットーに走り続けたいと思います。

FACULTY OF GLOBAL MANAGEMENT

世界を人に動かす Vol. 28

企業経営とグローバル経済の先端知識、優れたコミュニケーション能力を養うべく、国際経営学部生は前進を続けています。

ヨーロッパでの長期留学、それは私の高校生の時からの夢でした。中学3年の春休みに約1週間のイギリス語学研修に参加した私は、石造りの街並み、ホストファミリーとの生活、多民族でありながら距離の近い人々、そのすべてに衝撃を受け、自分の意識が一気にグローバルへと向いたことを覚えています。高校ではTOEICを繰り返し受験するなど英語力向上に励み、英語でビジネスを学ぶというワクワク感から迷わず国際経営学部に進学することを決意

しました。そして昨年2023年の9月から、交換留学の制度を利用し、イギリスのオックスフォードにて1年間憧れていた半年間の留学の夢を叶えることができました。留学中の濃密な経験から、そのいくつかをこの場を借りて共有したいと思います。

イギリスでの日常生活

現地に到着してからの最初の1週間、いや1カ月は、正直に言って過酷な日々を過ごしました。家賃の支払いがうまくいかずルームレントから追い出されそうになったり、渡航前に日本から送った荷物が受け取れず市街の倉庫まで回収に行ったりしました。また日本では実家暮らしだったため、自分で買い出しをし、自炊をし、洗濯をする生活に慣れるのにはかなり時間を要しました。憧れの異国の地に来たというモチベーションだけで何とかメンタルを保っていたように思います。一番の困難は到着から2カ月後に強いられる引越しでした。Webサイトで部屋を貸し出している人と連絡を取り、放

課後に内見を行う日々は、かなり貴重な経験だったと感じています。



オリエンテーションパーティー



パリに招待してくれた友人とエッフェル塔にて

イギリス留学がもたらした 挑戦と成長の軌跡

国際経営学部国際経営学科3年
私立中央大学附属高等学校(東京都)出身

林 隼誠
はやし じゅんせい

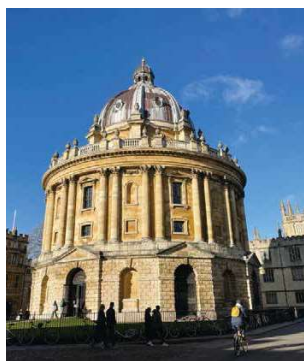
そんなハプニング続きのオックスフォード生活でしたが、その街並みは中世を思わせる本当に美しいものでした。石造りの街並みを歩く学生たち、そんな写真で私の携帯電話のカメラロールはいっぱいです。

EM Normandie Business School Oxford Campus

私が現地で所属していたビジネススクールです。2階建てのバスに30分ほど揺られ、通学していた日々がすでに懐かしく感じられます。フランスに拠点を置く学校だったため、生徒の9割がフランス人で、イギリスにいないが学校ではフランスに留学しているような気分でした。フランス語が飛び交う環境にストレスを感じることがありましたが、数少ない留学生の中でもさらに希少なアジア人に興味を持って英語で話しかけてくれる学生もいて、一緒に授業を受ける友達もすぐにできました。

半年間を通して苦労したのは、やはり課題とテスト勉強です。課題は読み物を中心としたものが多く時間を取られ、テストは完全持ち込み禁止の筆記型であったため、対策にかなりのプレッシャーを感じていました。学校のない平日や出かける予定のない休日、市内の図書館やカフェに赴き5、6時間勉強する日々は、今考えるとなかなかタフでした(笑)。

しかしそんな環境でも授業に遅れをとることがなかったのは、GLOMACでの学びのベースがあったからだと確信しています。英語で授業を聞き、ノートをとることに慣れてきたからこそ、授業についていくことはもちろん、授業中の生徒とのコ



オックスフォードを象徴する
ボドリアン図書館

ミニケーションを余裕持って楽しむことができた。フランス人学生と一緒に自習をする際は、私が教える側に回ることが多かったはずです。留学前の約2年間で成長が身にしみて感じられる半年間でした。

留学中の小旅行

休日の観光は留学の醍醐味のひとつです。前述の通り図書館やカフェに入り浸る休日が多かったものの、時間を見つけて何度かロンドンに旅行することができました。特に小学生の頃からテニス一筋の私にとって、ウィンブルドンの訪問は夢の時間であり、ほかにもハリーポッターの聖地やグリニッジ天文台、ゴッホの『ひまわり』で有名なナショナルミュージアムなどを満喫しました。大英博物館とウェストミンスター寺院（通称ビッグベン）などは2度目の訪問となり、私の人生の分岐点ともいえる地をもう一度踏めたことには、感慨深いものがありました。

また、年末休みには親友のトーマ



5年前は工事中で見られなかったビッグベン

スがバリの自宅へと招待してくれました。パリ市内を観光できたことはもちろん、海外の温かい家族と共に新年を祝えたことは何事にも変え難い大切な思い出です。

交換留学を通しての学び

半年間の海外生活を経て、得たことが大きく2つあります。

まず1つ目が、多様な背景を持ち、言語も国民性も違う仲間と協働するスキルです。数多くのグループワーク、プレゼンを通して、初めは意思疎通において言語の壁を感じましたしかし、これまで培ってきた英語力を総動員してコミュニケーションを取ることを諦めず、多くの困難を仲間と乗り越えた結果、一生切れることのない国際的なネットワークを築くことができました。

2つ目は度重なる困難を自分の力で乗り越えたことで生まれた自信です。冒頭で述べたこと以外にも、半年間でさまざまなハプニングを経験しました。最初は人に頼ることを躊

躇し、一人で抱えて込んでしまうこともありましたが、勇気を持って周りの人に頼ることが自分の成長へとつながりました。海外スケールの壁をいくつも乗り越えた帰国後は、大抵の問題はちっぽけに感じられて、さまざまなことに自信を持ってチャレンジできるようになった気がします。

また、海外生活を経て、日本の製品やサービスの質の高さ、海外での評価の高さを肌身で感じ、将来は、日本企業の海外事業展開をサポートすることができると考えています。このような軸を与えてくれた留学生活、そしてそれをサポートしてくれた両親に心から感謝し、今後も自分の夢をとことん追求したいです。



英語の実践力が伸びる GLOMAC の教育環境

すぎもと とよひこ
杉本 豊彦 国際経営学部助教

はじめまして、今年4月より国際経営学部（GLOMAC）へ着任しました杉本豊彦です。消費者行動論等のマーケティング関連科目を主に担当します。私は、日本で5年の社会人、オーストラリアで約5年間の留学を経験しましたが、これらの経験を学生の皆さんへ還元できることに強い喜びを感じています。

半期のGLOMACでの授業を通し、驚かされた点が2つあります。まずGLOMACの学生には、既に英語で自分の意見をアウトプットする力があることです。私は海外留学を経験しましたが、この力をつけることは容易なことではありません。なぜなら単純な英語力のみならず「自分の意見を考察」し、それを英語話者に対し「英語で発信する勇気」が求められるからです。これは、GLOMACで段階的に英語力を伸ばす優れた英語教育カリキュラムが支えているのだと思います。

さらに驚かされた点は、GLOMACには、この英語の発信力をもとに、英語を使った実践力を伸ばせる環境があるということです。GLOMACには日本人学生のみならず、交換留学生など多くの留学

生がいます。私は授業でしばしば少人数のグループワークを課しますが、その際、日本人学生はこれらの国籍・文化の異なる留学生と、与えた課題に対し英語でみずからの意見を述べ合うことで、英語を使った協調性、問題解決力を高めることができます。半期の授業でしたが、複数回のワークを通し、学生がこれらの実践力をメキメキ伸ばしていく姿に驚かされました。

昨今「英語で授業」というフレーズをよく耳にしますが、それはしばしば一方通行になりがちで、アウトプット力や実践力の養成まで及ばないことが多々あります。しかし、GLOMACには留学を通してでないと伸ばすことの難しい「英語の実践力」を伸ばせる学生の風土・土壌があります。これは多額の投資をして留学した私の目線からは大変魅力的な環境に映ります。

学生の皆さんがこの素晴らしい環境で、国際社会に求められる真の英語の実践力を養い、将来、国際舞台で活躍することに貢献できることに、今心を踊らされています。